『田原っ子十歳』

田原市片西　中島　健太郎

田原市に在住するようになって今年で十年になる。十年前、当時大学生だった私は経済的な事情から大学を中退し、知り合いの紹介で今の仕事を頂くようになった。

「紹介である以上、簡単にやめることはできないぞ。覚悟はできているか？」

面接前に釘を刺された。今の会社に骨を埋める覚悟を打診された気分だった。困窮していた私は首を横に振ることなどできない。覚悟を決めて面接に挑んだ。

採用の通知を頂き、入寮するために最低限の荷物をまとめて、田原市へ引っ越した。寮の周辺はコンビニがあるだけ。あとは、畑と山に囲まれた絵に描いたような田舎だった。関東の大学に在学していた時と全く違う。

車も所持していなかったので、買い物は二時間に一本しかないバスを利用するか、自転車で傾斜の激しい山道を超えて汗だくになりイオンまで行った。

自動車部品の製造に携わる仕事を頂いたが、元来不

器用で物覚えが悪い私は仕事がなかなか覚えられず、周りに迷惑をかけてばかりだった。

会社を辞めようと思ったことは何度もあった。お金が貯まったら都心に引っ越すことも夢見ていたが、そんな時に、同じ寮に住む職場の方に出会い、色々とアドバイスを頂いた。都心の厳しさや地方のメリット、仕事のノウハウも親切に教えてくれた。

四年前にその人は突発退社した。

「俺は高校卒業後、実家に仕送りするため派遣社員として全国を渡り歩いてきた。お前はこの地に根付いて強く生きろ。お前はもう一人でやっていけるから大丈夫だ」

その言葉は今でも記憶に残っている。都心に引っ越したい気持ちは消え去り、休日は趣味の読書を楽しむべく、中央図書館の個室を利用して毎日を楽しく過ごしている。